



古文眞寶

地

地

~16
849
2





群本大字諸儒美辭古文真寶卷之四

後集



託類

西漢最著後集二十七卷漢後漢白世傳黃庭經與論道教經
蘭亭序晉王會稽又曰黃庭經
廿一卷疑託類又曰古託類又曰託類三分
別託之託有託也上託天能本託地能日本其事而託之十二年曰託取歲星二周

蘭亭託

王右軍蘭亭託其文甚麗祖天朗氣清
春言秋景惠謂當時天色清朗冰陰晦之象而
山陰林下之氣清而爽者夫冰謂清秋也

永和九年

晉穆帝
東晉六年

歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰

之蘭亭脩禊事也

韻語陽秋云上巳於流水上洗濯
袂除去宿垢謂之袂禊二者案也

賢畢至女長侍集

此畫說蘭亭
取會之時

脩竹又有清流湍映帶左右引以為流觴曲水激

晉武
帝

麟三百七十
六方歲分
為十統二十
七方六十年
為一統
託字託其
義也故
平字辨

東坡集三十九回馬公神道碑文其良君於此如類予之在酒若累如屈原之在波羅其子與相也久矣而名東天下如雷如可謂之

迂叟平日讀書上師聖人下女群賢親仁義之系探禮樂之緒自未始有形之前豈四達無窮之外造物之理萃集目前可考學之未至夫可何求於人何待於外哉志倦身疲則投竿取魚執社采桑矣渠灌花操斧割亦濯熱與水臨高縱目道途徬徨推意所適明月時至清風自來行無事止無所極也履有隔三洋不知天壤之間後有向泉可以代也因合而會之曰社樂

勝覽卷之四有明月山在西南諸峰列於一山行六七里漸聞水志溪而深秀者即耶也此一截而瀉出于兩峰之間者醴泉也此一截峰回路轉有翼臨于泉上者醉翁亭也此一截作社者誰山之僧知化也名之者誰太守自謂也此一截太守與客未飲于此飲也醉而自又最高故自號曰醉翁也此一

醉翁亭記 東谷曰云此者記其事而今之記乃醉翁亭記也故云此記直記其事而文出自歐陽永叔 其西南諸峰林麓尤美望之蔚然而深秀者即耶也此一截 山行六七里漸聞水志溪而瀉出于兩峰之間者醴泉也此一截 峰回路轉有翼臨于泉上者醉翁亭也此一截 作社者誰山之僧知化也名之者誰太守自謂也此一截 太守與客未飲于此飲也醉而自又最高故自號曰醉翁也此一

萬次臨泉上名曰回響泉... 此泉在陽山... 石心未嘗不其個其... 下度子泉... 平地厚其... 泉則指一大井... 度子泉... 之泉在陽山

醉翁之意不在酒在乎山水之間也山水之樂
得之公而寓之酒也此一截說其樂在山水與前面相應若夫日出而林

泉開雲散而石出暉晦明變化者山之朝暮也野芳
發而幽香佳木秀而繁陰風霜高潔水落而石出者山

間之四時也朝而往暮而飯四時之景不同而樂亦無

窮也此一截說朝暮四時景象至於負者歌于途行者

休于樹前者呼後者應偃仰視聽心樂之及
俛仰視聽往來而不絕

者滌人遊也此一截說滌人同樂臨溪而漁溪深

而魚肥釀泉為酒泉香而酒冽山肴野饌雜然而前陳
者太守宴也宴酣之樂非絲竹射者中乎者勝觥籌

交錯莊坐而誦詩者眾賓歡也蒼顏白髮頹乎其中間
者太守醉也此一截說太守與眾賓同遊而醉已而夕陽在山人影散

亂太守飯而賓客從也樹林陰翳鳴壺上下遊人去而
禽鳥樂也此一截說禽鳥知山林之樂然而禽鳥知山林之樂而不知

人之樂人知從太守遊而樂而不知太守之樂其樂也

此一截說太守所樂之真在平日无此醉能同其樂醒

數語則前面許多鋪張都无合處矣

韓琦字稚圭相州人年二十一登進士第賜名琦第一甲終大史參知政事下五也嘗見子相十年後子以眼其後更重韓琦曰

能述以文者太守也太守謂誰說也序陵汝陽備也

書錦堂記

韓子西語錄云凡為文上句重下句輕則或為上句廢倒登錦堂記云仕官而至將相富貴而故鄉下云此人情之所榮而今昔之所同也此其兩句莫能承上句此為文之法也

汝陽永叔

任官而至將相富貴而故鄉此人情之所榮而今昔之所同也

皆得易而悔之若季子不礼於其嫂史載季子從

而故妻不丁梳嫂不為炊後為秦相佩六國印見谷先生游焦輝

妻嫂側目不敢視秦史曰何前倨而後恭也嫂謝曰

見季子位高金多也朱買臣家貧常艾薪樵賣

矣曰汝若日夕待我富貴報汝功妻患怒曰一旦高車

如公等終歸死海中耳買臣不能當所

駟馬旗旄道前而騎卒擁後夾道之人相與駢肩累迹

瞻望咨嗟而所謂庸夫愚婦者奔走駭汗羞愧俯伏以

自悔眾於塵車馬足之間此一人之士得志當時而意

氣之盛昔人比之衣錦之榮者也惟大丞相衛國公則

不然韓魏不請相及人初封魏國公至和中公相人也

先着此世有令德為時名第則必女時已擢高科登頭

一句

韓琦字稚圭相州人年二十一登進士第賜名琦第一甲終大史參知政事下五也嘗見子相十年後子以眼其後更重韓琦曰

能述以文者太守也太守謂誰

序陵汝陽備也

書錦堂記

韓子西語錄云凡為文上句重下句

任官而至將相富貴而故鄉此人情之所榮而今昔

之所同也

皆得易而悔之若季子不礼於其嫂

而故妻不丁梳嫂不為炊後為秦相佩六國印

妻嫂側目不敢視秦

見季子位高金多也

矣曰汝若日夕待我富貴報汝功

如公等終歸死海

駟馬旗旄道前而騎卒擁後夾道之人相與駢肩

瞻望咨嗟而所謂庸夫愚婦者奔走駭汗羞愧俯伏以

自悔眾於塵車馬足之間此一人之士得志當時而意

氣之盛昔人比之衣錦之榮者也

不然

先着此

一句

高牙又選乃建續也
說軍前所呼令則
至牙旗之下又東京
賦注天子出建大牙
旗半一師之以象牙
牙象合取五未羽日
羽存

相正詩話云永叔作韓文公傳書錦堂記開石一碑本寫長年道三嗟嘆久之惜乎不先寫老使此
記遂有少類於此康之節未治於相西句中可去之乎不然以出康之節未治相又不然以出康之節未
治於相見西句後集十三

西漢前集二十二年更詳略云韓魏公龍相母其新進多凌慢魏公辭之不得去會為說三風定時故胡
韓魏公與春園枯樹園人林其傲然
類記云魏公在出門更陽德諸曹於後園有前一段石不處花園秋容淡且看落花晚節者公居青鶴保
初節身保暇能難故晚節身尤看其真節自節直欲黃花晚節尤可惜青眼故人殊不來與魏
公相看黃花晚節
香露林黃花用晚
節一二年美意一太正
搖落一時惟菊花
獨秀故可用此三字

仕海內之士聞下風而望餘光者蓋亦有年矣所謂將
相而富貴皆公所宜素有出莊子此戰國策
護此如窮阮之人僥倖得志

於一時出於庸夫愚婦之不意以驚駭而夸輝之也然

則高牙大轟牙者車輪輻牙也轟者車上羽葆幢也不足為公榮桓圭家禮記春官甸人甸人上公九寸

裳桓圭三公所執不足為公貴惟德被生民而功施社

稷勒之金石播之聲詩以耀後世而垂無窮此公之志

而士以此望於公也豈止夸一時榮一鄉哉公在至和

中嘗以武康之節未治於相乃作書錦之堂于後圃既

又刻詩於石以遺相人其言以快見歸名書為可薄
蓋不以昔人所夸者為榮而以為戒韓公之戒於此見
公之視富貴為何如而其志豈易量哉故能安將相
勤勞王家而夷險一節至於臨大事決大議委紳正務
不動声色而措天下於泰山之安語可謂社稷之臣矣
其豐功盛烈所以銘彝鼎而被絃歌者乃邦家之光泚
則里之榮也占地余雖不獲登公之堂幸嘗親聞公之
詩樂公之志有成而喜為天下道也於忠平書

前漢易嚴助傳曰使公之臣安生也書則澤被天下矣天下之安猶泰山

對曰石鼎詩若以三詩未卒又世何不以參中子之句已分矣

述備美也則其通平峽南極浦湘遠客騷人多會于此

覽物之情得無興乎若夫雲雨霖霖連月不開臨風怒

號濁浪排空日星隱曜山岳潛形商旅不行檣櫓摧

薄莫莫之虎嘯猿啼登斯樓也則有志固懷抱安說異

譏滿目凄然感極而悲者矣

景明波灑不驚上下天光一碧萬頃沙鴻翔集錦鱗游

泳岸芷汀蘭郁青而或長煙一空皎月千里浮光

躍金靜影沉璧漁歌互答此樂何極登斯樓也則有心

建中祝禱初又其以
中子部之為猿啼虎
鳳野轉行慶清華

直落人前入

此亦一柱

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

勝覽二十九卷安祝禱
和文兵列其六部云先
天下之樂後天下之樂
不在茲乎有刺史一
宋元刺史一雜非足
詩矣

曠神怡電奪皆忘把酒臨風其喜洋洋者矣

萬狀而人情所感不過二端。作山歌語云嗟夫子肯

來古人之心或與二者之為何哉

以已悲人情所感不過二端而仁人之心出外居

廟堂之高則憂其民處江湖之遠則憂其君是進亦憂

退亦憂也則何時而樂耶其必曰先天下之憂而憂後

天下之樂而樂歟

而樂其其志也

噫微斯人也

此亦一柱

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

此二句水天也

方輿勝覽五建德府古蹟七里碑注云距州中十里與嚴陵相接該三月國七里謝靈運詩自觀嚴子廟相

祠注有鈞其先生名

光字子陵後光武十

年光武自臨學及即位

首以物也詩之得之於

新國累召不至拜諫

議不受去耕釣於富

春山今有鈞其祠在

又作九陽寺以奉香火

子陵本姓莊避明帝

諱改姓嚴又鈞其

位桐廬西南二十九

里東水西二里各高

數百丈許潭前云潮

去則水則沸春山花

如綠草如青巖後世

下桐江水解釣新魚

有幾人

世希文氣便包六合

相與其氣一貫地情

的毛世祖功臣三十六

世世相爭似鈞其祠

黃帝直前平生久要

列文叔不肯厚作三

公能令便家重九氣

相江波上舞風

下桐廬其地傳曰山下有風

風起山而回物皆搖亂是為有風

嚴先生祠堂記

按本傳云陵本姓莊避明帝諱

改姓嚴光武拜諫諍不受耕釣

於富春山今有鈞其祠堂在嚴州

桐廬縣迂云字子陵嚴筆力老健

布文

先生光武之故人也相尚以道

此是一篇

及帝握赤符

漢為大德中微光

乘六龍得聖人之時臣妾億兆

法

天下孰加焉惟先生以第高之既而動星象

論道曰故自共偃卧光以足加帝腹明日太史奏

客星犯帝坐甚急帝笑曰朕故人嚴子陵共卧耳

江

洲得聖人之清泥逢軒冕

天下孰加焉惟光武以禮

下之謝云兩段並說異曲抑揚便見先

在靈之上九眾

生不屈光武光武不屈先生之意

方有為而獨不事王侯高尚其事先生以之

此段說易

在屯之初九陽德方亨而能以貴下賤大得民也

此段說易

光武以之

此段說易

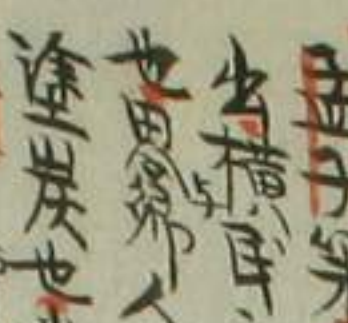
之上光武之量包乎天地之外微先生不能成光武之

大微光武豈能遂先生之高哉

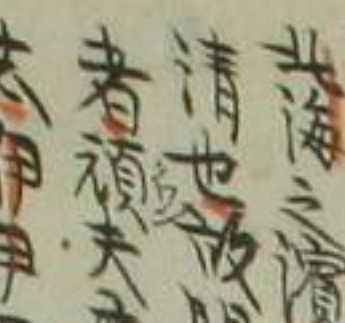
而使貪夫廉懦夫



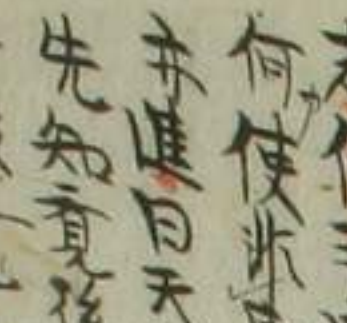
孟子第十篇章句下... 屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也



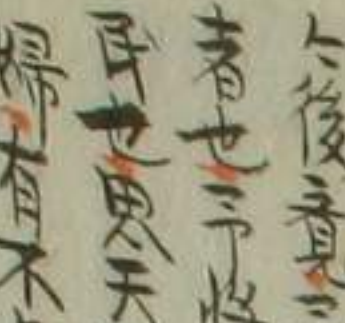
屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也



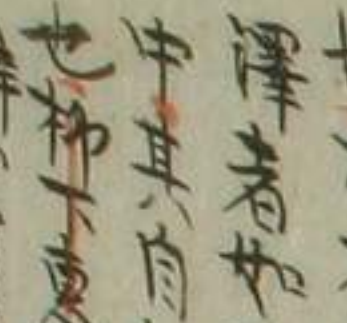
屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也



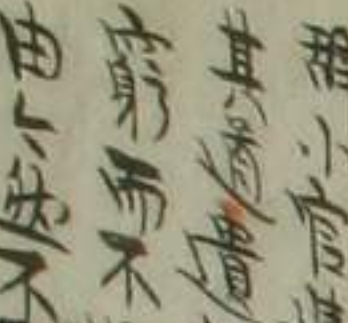
屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也



屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也



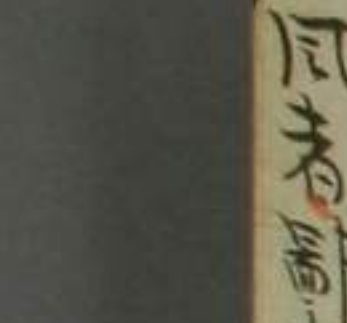
屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也



屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也



屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也



屯卦... 陽而柔居下... 所以大得民也

又選謝文輝記注云
嗣在晉一名并幹樓
漢高祖五年并幹
樓高五丈大幹音幹
師古曰積木而高不積
若并幹之積木并幹其
井上不稱木也并幹
其故在角八角謂之
木幹并樓也

東漢傳載謝文輝
古曰謝文輝阿上名
樓以並名並故謂美
樓之樓為樓樓亦呼
為樓并樓并車者木
兵車一上為樓以並敵
並樓亦名也本一為也

又選謝文輝記注云
嗣在晉一名并幹樓
漢高祖五年并幹
樓高五丈大幹音幹
師古曰積木而高不積
若并幹之積木并幹其
井上不稱木也并幹
其故在角八角謂之
木幹并樓也

勝覽二年江府藩
彼者西晉晉里高則高矣并幹樓華則華矣上于貯奴
女感歌舞流騷人之事古所不取
工云竹之為瓦僅十稔若重復得二十稔樓古以至
道之未歲
自翰林出滄上西申移廣陵丁酉又
入西拔戊戌歲除日有奇安之幸己亥閏二月到郡辛
之間奔走不暇未及明年又在何處置樓竹樓之易朽
乎後之人與我同志嗣而葺之庶斯樓之不朽也
咸平二年八月十五日誌

自翰林出滄上西申移廣陵丁酉又
入西拔戊戌歲除日有奇安之幸己亥閏二月到郡辛
之間奔走不暇未及明年又在何處置樓竹樓之易朽
乎後之人與我同志嗣而葺之庶斯樓之不朽也
咸平二年八月十五日誌

待漏院記

遷肅云句句見待漏意是時五代氣
習未除未免補術然詞嚴義正可以
想見其人
亦自得休

王元之

天道不言而品物亨咸功成者何謂也四時之吏五行
之佐宣其氣矣已上論天道之助以天
姓親方邦寧者何謂也三公論道六卿分職張其教矣
對言論聖
是知君選於上臣勞於下法乎天也
古之善相天下者自於憂至房魏可數也
是不独有其德亦肯務于勤耳
况夙與夜寐以

本藩一國史補每元日各至大朝會百官已集而宰相方至可率列...
致皆減...
用...
止...
切...
有...

事一人卿大夫猶然况宰相乎以上論古朝廷自國初

因旧制設宰臣待漏院于丹鳳門之右九宰相來朝至

而後示勤政也按上勤至若北關向曙東方未明相君

啓行煌煌火城相君至止噦見毛詩有東方未明金闕未闢玉漏猶

滴撒蓋下車于宮以息待漏之際相君其有思乎君待

漏之意其或其或兆民未安思所養之河夷未附

思所養之兵革未息何以殫之田疇多蕪何以闢之負

人在野我將進之佞臣之朝我將行之陰陽氣不和九

東都事考三十九王...
天下矣...
奉...
奏...
九...

存至碩遊位以讓之五刑未措欺詐日生請後德以登

之憂心中待且而入九門既啓四聰其或私讎未復思相君言享

時君納身皇風于皇平清夷養生以之而富庶若然則

終百官食不錢其或私讎未復思也且也其或私讎未復思

所逐之伯思未報思所榮之子女其或私讎未復思身何以致之軍馬

器玩何以取之婦人附勢我將陟之直士抗言我將黜

之三時告失上有憂色其或私讎未復思搆詞以悅之群吏畏法君聞

從言進諂容以媚之私心始其或私讎未復思僭竊而坐其或私讎未復思

九...
不...
九...
九...
九...

九門既其或私讎未復思

東晉一... 高... 曰... 井...

東晉... 曰... 井...

開重... 言... 時... 政... 柄... 于是乎...

位... 之... 而... 老... 矣... 若... 然... 則... 死... 下... 獄... 投... 遠... 方... 此... 不... 幸... 也... 亦... 宜... 也...

也... 以上... 說... 是... 知... 一... 國... 之... 政... 事... 入... 之... 命... 懸... 于... 宰相... 可... 不... 慎... 也...

次... 復... 有... 無... 毀... 無... 言... 一... 轉... 旅... 進... 旅... 退... 禍... 位... 也...

苟... 祿... 備... 官... 而... 全... 身... 者... 亦... 無... 所... 取... 焉... 棘... 寺... 小... 吏... 也...

王... 尚... 儻... 為... 文... 請... 諸... 院... 壁... 用... 規... 于... 執... 政... 者... 結... 之... 似... 簡... 休... 也...

諫院題名記

可... 以... 想... 見... 其... 人... 也...

司馬君實

西... 晉... 諫... 院... 題... 名... 記... 司... 馬... 君... 實... 也...

後... 漢... 興... 以... 美... 始... 置... 官... 夫... 以... 天... 下... 之... 政... 而... 海... 之... 衆... 得... 失... 利... 也...

古... 者... 諫... 官... 自... 公... 帛... 大... 夫... 至... 于... 工... 商... 無... 不... 得... 諫... 者... 也... 漢... 興... 以... 美... 始... 置... 官... 夫... 以... 天... 下... 之... 政... 而... 海... 之... 衆... 得... 失... 利... 也...

大... 捨... 其... 細... 先... 其... 急... 後... 其... 緩... 專... 利... 國... 家... 而... 不... 為... 身... 謀... 彼... 汲... 也... 其... 間... 相... 去... 何... 也...

二... 於... 名... 者... 損... 汲... 於... 利... 也... 其... 間... 相... 去... 何... 也... 遠... 哉... 天... 禧... 初... 真... 宗... 詔... 置... 諫... 官... 六... 自... 責... 其... 職... 事... 慶... 曆... 中... 錢... 君... 始... 書... 其... 名... 於... 版... 吏... 恐... 久... 而... 漫... 滅... 嘉... 祐... 八... 年... 刻... 着... 于... 石... 後... 之... 人... 得... 歷... 指... 其... 名... 而... 議... 之... 曰... 某... 也... 思... 某... 也... 非... 某... 也... 直... 也...

遠... 哉... 天... 禧... 初... 真... 宗... 詔... 置... 諫... 官... 六... 自... 責... 其... 職... 事... 慶... 曆... 中... 錢... 君... 始... 書... 其... 名... 於... 版... 吏... 恐... 久... 而... 漫... 滅... 嘉... 祐... 八... 年... 刻... 着... 于... 石... 後... 之... 人... 得... 歷... 指... 其... 名... 而... 議... 之... 曰... 某... 也... 思... 某... 也... 非... 某... 也... 直... 也...

君... 始... 書... 其... 名... 於... 版... 吏... 恐... 久... 而... 漫... 滅... 嘉... 祐... 八... 年... 刻... 着... 于... 石... 後... 之... 人... 得... 歷... 指... 其... 名... 而... 議... 之... 曰... 某... 也... 思... 某... 也... 非... 某... 也... 直... 也...

後... 之... 人... 得... 歷... 指... 其... 名... 而... 議... 之... 曰... 某... 也... 思... 某... 也... 非... 某... 也... 直... 也...

東... 晉... 一... 高... 曰... 井...

大興勝覽第十九江... 某也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

其也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

其也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

其也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

其也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

其也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

其也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

其也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

其也曲為軍可不懼哉... 皇帝二十有三年... 有臣力... 連數城亡... 范陽祖君... 懼人材... 伏聞而是之... 乃營治之... 黜... 備... 且有... 已... 敬帝... 其夫... 秦... 國...

後何邪詩局之道廢人惟見利而不聞義我耳孝

武來豐當世祖出我行皆夢三字術俗化之學短于靈

獻草茅危言者折首而不悔功烈震主者聞命而釋兵

群相視不敢去臣位尚數十午教道之結人心如此

今代禮聖神亦表得聖君得由序序

踐古人之迹天下治則禮樂以陶古民一有不孝九

當仗大節為臣死忠為子死孝謝此等又有十國使

又有所賴且有所法是惟朝家教之意著其異筆以

命道是言先行注
曰老屈也非有欲可以
屬其心也又曰
師古注老也直也
聖君一曰解作
周注曰大守也
其謂曰禮聖神亦表得聖君得由序序
作賢君子向解則此
本作禮聖神不可取

陳師道字無已自號東野先生其先世居海州其父文舉為州縣令文舉有文才其先世居海州其父文舉為州縣令文舉有文才其先世居海州其父文舉為州縣令文舉有文才

微利達而已豈徒二三子之羞抑亦為國者之憂

思其記行清云萬事相生由際相不後之度陳師道

孰其人無名故徐富家至孰君始以明經教授稱善

人而家益貧更教十歲不克葬乞貨邑里葬其父母見

弟九幾喪邑人憐之多助之者既葬益樹以木作堂其

旁而問名於余序事曰弟一弟叙其二弟叙其三弟叙其

而思從之且說思之所始視于戈則思聞視刀鋸則思

懼視廟社則思敬視冢家則思安夫人在好惡喜懼

其不孝也子能介於陳
君子公知其入負其困
陳金銀之及觀其貌
其其論議竟不取以
出又詳見師道詩
集三序及跋
師道後集三十三卷
帝制句其生精力
於其未愈存力已疲
子願子推其德也

其先世居海州其父文舉為州縣令文舉有文才其先世居海州其父文舉為州縣令文舉有文才

其先世居海州其父文舉為州縣令文舉有文才其先世居海州其父文舉為州縣令文舉有文才

心物至而思固其理也又其一思字今夫要記應朱

高以望松梓下土壠而行墟墓之間荆棘莽然狐兔之

迹交道其有不思其親者乎請名之曰思其某上節論

名親者人之所不忘也而君子慎之故為墓於郊而封

溝之為廟於家而嘗禘之為裏為邑而悲哀之所以有

其思也其可忘乎第三節論雖然自親而下至于服盡

服盡則情忘則忘之矣夫自古之親而至于忘之

者遠故也其所以作易而作其九君子孫也

禮記大傳禮不主本稱
云諸侯及其太祖大夫
士大夫士大夫其君
干裕及其太祖大夫
祭不及其祖則謂
自能可也其祖則謂
其祖也

禮記大傳禮不主本稱
云諸侯及其太祖大夫
士大夫士大夫其君
干裕及其太祖大夫
祭不及其祖則謂
自能可也其祖則謂
其祖也

登斯亭者其有忘乎因其親以廣其思其有不與乎君

曰博志子之言也古其庶乎自未也自不有思後

不有望其木思以材視其榛棘思以爲薪登其丘墓

思發其所藏者乎於是處也流涕泣泣自未也百尺竿

吾為子能之使君之子孫誦斯文者視其美以爲勸

視其惡以爲戒其作託其可免乎君撫涕而謝曰免矣

遂為之託第六節論其可免乎君撫涕而謝曰免矣

解本大字諸傳美解古文自實為之由師論其論後集

解本大字諸傳美解古文自實為之由師論其論後集

解本大字諸傳美解古文自實為之由師論其論後集

此類之類可為... 大... 前... 後...

前... 後...

此... 前... 後...

魁本大字諸儒美解古文真寶卷之五 後集

箴類

大寶箴

聖人之大寶... 其... 可示... 聖...

今來古往俯察仰觀推辟作福

難... 主普天之下... 王公之上... 任土貢其所求

具... 其所得是故恐懼之心... 弛邪僻之情轉放...

知事... 乎... 禍生乎... 固以聖人受命極... 身也

類聚作无

一天子

五

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

天子天下天下天下
天子天下天下天下
天子天下天下天下

歸罪於己因公於民大明無私毀至公無私觀改以
人治天下不以天下奉一人禮以禁其奢樂以裕其佚
九言而右事前藝文志古之王者世有史官若事必存
并以謹言行昭法也左史記言右史記
事以爲春秋

出言而入諫張休休傳天子之居禁衛九
重出也諫入也諫諍者戒肅
諫者止

四時調其婚嫁三先同其得失故身爲之度而
行人

積小就大樂不可極樂極生哀欲不可縱欲成失壯
九重於內外居不過容膝彼昏不知瑤其臺而履其
子之哀者是也

彼昏一旬解注彼昏者謂其無道也

通鑿外統紂作康羅於前所食不過適口禮天官
羅於前所食不過適口禮天官

池其酒且志孫權於武昌臨酌臺殿醉以水酒群臣面
爲精上酒池長夜之飲當時

亦以爲樂不以爲憂權歎也

勿貴難得貨老子不貴難得之
也

勿聽亡國音詩樂誌桑
間濮上之

音淫勿謂我尊而傲賈博士勿謂我智而拒諫發已聞
之夏后據饋類記亦有魏帝幸祿不上

音七國由荒伐人性外荒蕩人心難得之貨侈亡國之
音也

音淫勿謂我尊而傲賈博士勿謂我智而拒諫發已聞
之夏后據饋類記亦有魏帝幸祿不上

音七國由荒伐人性外荒蕩人心難得之貨侈亡國之
音也

音淫勿謂我尊而傲賈博士勿謂我智而拒諫發已聞
之夏后據饋類記亦有魏帝幸祿不上

音七國由荒伐人性外荒蕩人心難得之貨侈亡國之
音也

音淫勿謂我尊而傲賈博士勿謂我智而拒諫發已聞
之夏后據饋類記亦有魏帝幸祿不上

音七國由荒伐人性外荒蕩人心難得之貨侈亡國之
音也

魏一論諸君伯為十日大哉先之言君也魏一乎唯天為大唯堯則之萬二千民無能名焉

詩之不識一旬解注 魏志一旬解注 魏志一旬解注 魏志一旬解注

不還久矣 安彼反側如春陽秋露魏一落一拔信其大度

乃出 前高祖紀帝有大度 撫茲庶事如復薄暉深敦三擇

不事家入生產作業 用周文之詩 詩之不識不知各之無益也

黨一彼於胸懷 好者於心相象 舉而後加刑 眾悅

而後行賞 其強而治其礼 伸其屈而直其枉 故曰如

衡如石不定物以限物 應者輕重自見 如水如鏡不

示物以情物之 善者自生勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿 勸勿

類聚又作技三及通用見前會

言語太多則已肆物性於已則縱肆於物則違性出悖未違言悖

逆而背於理故求法不道欽或訓詳

勤儉

哲人知幾幾者動誠之於思思誠者人之志士勵行有

不可不守之於為有為必守其理也順理則裕順於理從欲

惟危後欲而動告次克念造次倉卒戰兢自持戰兢

習與性成習憤自然聖賢同故與聖賢人

銘類

銘類一車類馬則其才以文章奇以文銘也邦馬或注銘之為言

晉曰於山陽居編... 魏者俾傳行耳夫銘之作不於楊先相之美則於受或過也非此三金不銘矣楊先相之美者宋景公也皆

陋室銘

山不在高有仙則名水不在深有龍則靈斯是陋

室惟吾德馨苔痕上階綠草色入簾青談笑有鴻儒往

來白丁可以無事無絲竹之亂耳無案牘

之勞形南陽葛亮在蜀子真與孔子云何陋之有

故馬九夷或曰陋者何陋之有化大圖石而為之則陋者何陋之有

子曰君子居之何陋之有

克己銘 勝己之私 德克己私 德克己私 德克己私

呂與叔 德克己私 德克己私 德克己私 德克己私

德克己私 德克己私 德克己私 德克己私 德克己私

事夫已具矣自此推之... 下之孤弱乃... 聖其合德... 凡天下疲癯殘疾博獨

且不要女純乎孝者也... 弟之秀也... 弟之秀也... 弟之秀也... 弟之秀也

其踐形者惟肖也... 知化則善其事... 窮神則善其志... 不規屋漏為無不

事天矣... 而君子... 而則所... 而則所... 而則所... 而則所

事天矣... 而君子... 而則所... 而則所... 而則所... 而則所

事天矣... 而君子... 而則所... 而則所... 而則所... 而則所

事天矣... 而君子... 而則所... 而則所... 而則所... 而則所

事天矣... 而君子... 而則所... 而則所... 而則所... 而則所

事天矣... 而君子... 而則所... 而則所... 而則所... 而則所

世計其故何也其為體也筆最銳筆次之硯鈍者也豈
大不相近也筆之壽以日計墨之壽以月計硯之壽以
硯與筆墨蓋氣類也必相近在相用也相近也獨壽
者其所以為相用者其所以為相用者其所以為相用者
其所以為相用者其所以為相用者其所以為相用者

亦鈍者壽而銳者太平其為用也筆最動墨次之硯靜
者也且近靜者壽而動者太平其為用也筆最動墨次之硯靜
養生也其所以養生也其所以養生也其所以養生也其所以養生也
也非鈍銳動靜所制借令筆不銳不動吾知其不能與
視久遠也雖為筆為其力為彼也銘曰不能銳因以鈍

為體不能動因以靜為用惟其然是以能永年
文類不相隨故則為筆為墨為硯為筆為墨為硯為筆為墨為硯
此山移文 孔雅在至太子為筆 鐘山在都北其
文類不相隨故則為筆為墨為硯為筆為墨為硯為筆為墨為硯

鐘山之莫草堂之靈 二神の假也煙驛路勒杉山度夫
以耿介拔俗之標兼造出塵之想度白雪以六響于青
雲而自有奇方知之矣若其真二物表皎二霞外大千

此山移文 孔雅在至太子為筆 鐘山在都北其
文類不相隨故則為筆為墨為硯為筆為墨為硯為筆為墨為硯
此山移文 孔雅在至太子為筆 鐘山在都北其
文類不相隨故則為筆為墨為硯為筆為墨為硯為筆為墨為硯

聖王得臣... 頌類... 後集

頌類

聖王得臣

頌類... 聖王得臣... 頌類... 聖王得臣...

王子淵

夫有旃被... 王子淵... 夫有旃被...

夫有旃被... 夫有旃被... 夫有旃被...

夫有旃被... 夫有旃被...

夫有旃被... 夫有旃被... 夫有旃被...

夫有旃被... 夫有旃被... 夫有旃被...

賜又于百有九合諸侯不以兵車管仲之力也

得人者勤於求賢而遂於得人

昔賢者之未遭也國事揆策則君不用其謀

誠則上不為其信進任不得施效

伊尹勤於求賢大公困於敵力百里自

及至遇明君遇聖主也

伊尹勤於求賢大公困於敵力百里自

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

及至遇明君遇聖主也

以上論聖主

人臣亦然

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

由此觀

或亦云

晉書劉伶傳十九劉伶字伯倫沛國人也身長六尺容其甚陋然放情肆志常以酒為樂每飲必醉或問其故曰
婦人善交遊子既
籍都庸相與飲神
醉便手入林初不以家
產有無不為意常未
嘗有酒一壺酒使人
有醉而隨之謂曰死
便埋我
文選西十七酒後頌劉伯
倫所作題注才子善曰
載宋緒晉晉曰劉伶
字伯倫沛國人也容
曠放以字宙為狹者
酒使頌為建威將軍
卒以壽終
劉伶字伯倫沛國人也容
曠放以字宙為狹者
酒使頌為建威將軍
卒以壽終

酒德頌

劉伶字伯倫沛國人也容其甚陋然放情肆志常以酒為樂每飲必醉或問其故曰
婦人善交遊子既
籍都庸相與飲神
醉便手入林初不以家
產有無不為意常未
嘗有酒一壺酒使人
有醉而隨之謂曰死
便埋我

有大人先生假託以天地為一朝一期為須臾日月為
行無

高牖八荒為庭衢張氏曰高牖門之八荒以天地開闢已未為一日一歲
行無

轍跡若無更度天席地終意所如止則操危執解動
則擊楫提壺擊也危解楫唯酒是務焉知其餘有貴

介公子搢紳處士介大也搢紳服第聞奇風志議其所
以乃奮袂攘袂矜自切齒介公子處士陳說礼法異冰

鋒起說礼法制以示先生其是先生於是方捧腹
美精銜孟傲傲先生不傲二人之說奮髯踞蹠枕麴糟

精言動舉展足倚杖而坐也藉鋪也藉鋪也鬼血
覆其象陶陶也而醉投下而醒靜聽不聞雷震之聲

熟視不見泰山之形不覺寒暑之切肌膚感之感情俗
觀万物擾擾也如江漢之浮萍言見可物如水中一草
侍側女子舞靡之與頰於三蒙諸公子也士也埋靡頰

側有女女也見見也
咸咸也樂樂也音音也

十女中仲尼化漢也

晉書劉伶傳十九劉伶字伯倫沛國人也身長六尺容其甚陋然放情肆志常以酒為樂每飲必醉或問其故曰
婦人善交遊子既
籍都庸相與飲神
醉便手入林初不以家
產有無不為意常未
嘗有酒一壺酒使人
有醉而隨之謂曰死
便埋我
文選西十七酒後頌劉伯
倫所作題注才子善曰
載宋緒晉晉曰劉伶
字伯倫沛國人也容
曠放以字宙為狹者
酒使頌為建威將軍
卒以壽終
劉伶字伯倫沛國人也容
曠放以字宙為狹者
酒使頌為建威將軍
卒以壽終

觀游蓋泉石園中自有種植

長安家富人為觀游及賣果者皆爭取養視既於

種樹或要徒無不活且碩茂金寶之蕃他植者雖適伺

傲慕莫能如也有問對曰養馳非能使木壽且藝也

以能順木之天以致其性乎凡植木之性其本欲舒

其培故平其土故故其築故密既然已勿動勿慮去不

復顧其時也若子其實也若棄行日之之非建年之為

則其天者全而其性得矣天便是性也故吾不

言其長而已能助長亦有能碩而茂之也不抑耗其實

樹身之... 視... 又...

而已沐有能垂而蕃之也應上又碩茂也他植者則不

然根拳而土易其培之也若不遇旱則不及焉不順其性之反

苟有能反是者則又婁之太息憂之太勤與前且視而

暮植已去而復觀而其者介其庸以驗其生指推其本

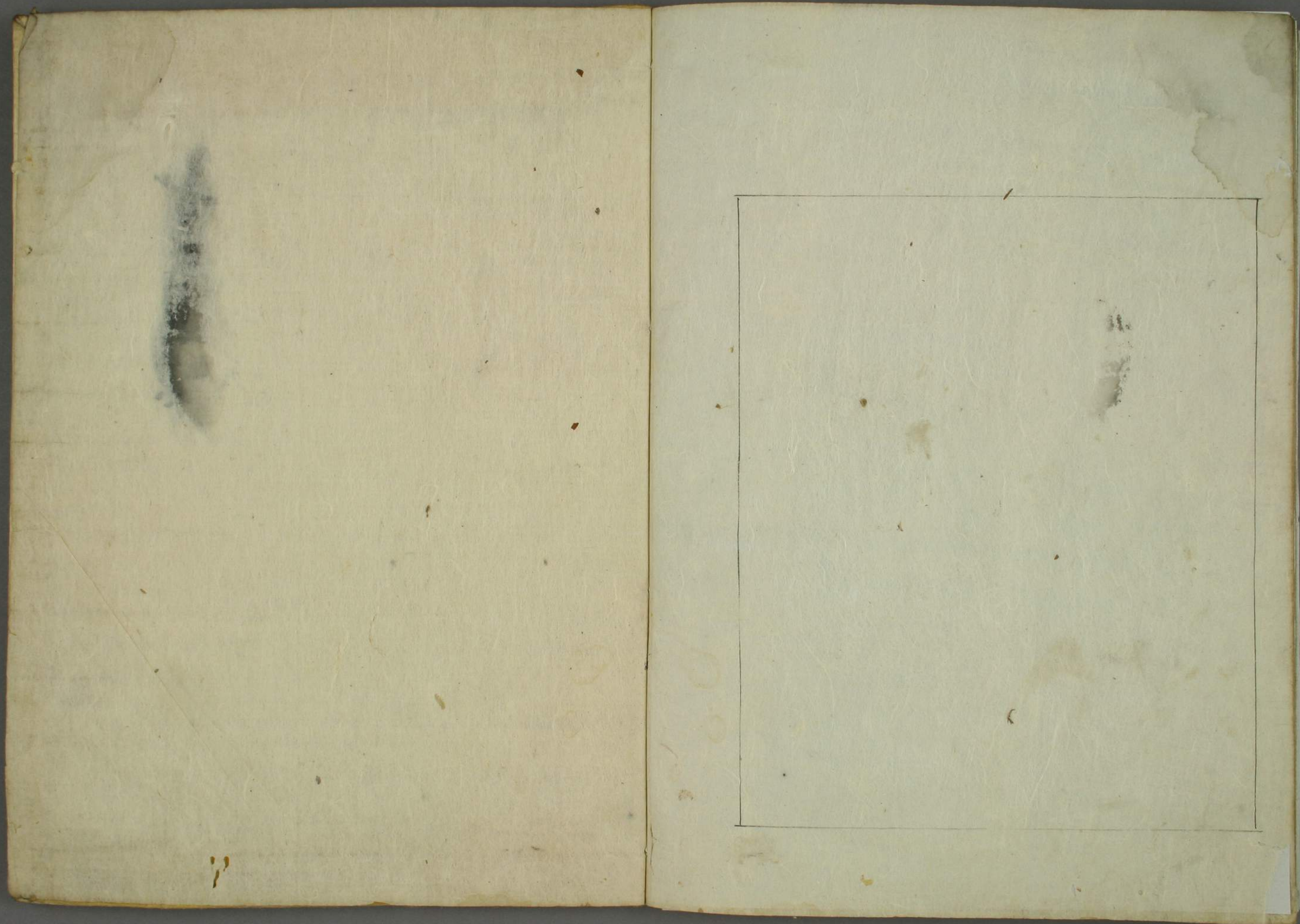
以觀其疎密而不之性日以離矣形容助長之病如親見雖曰愛

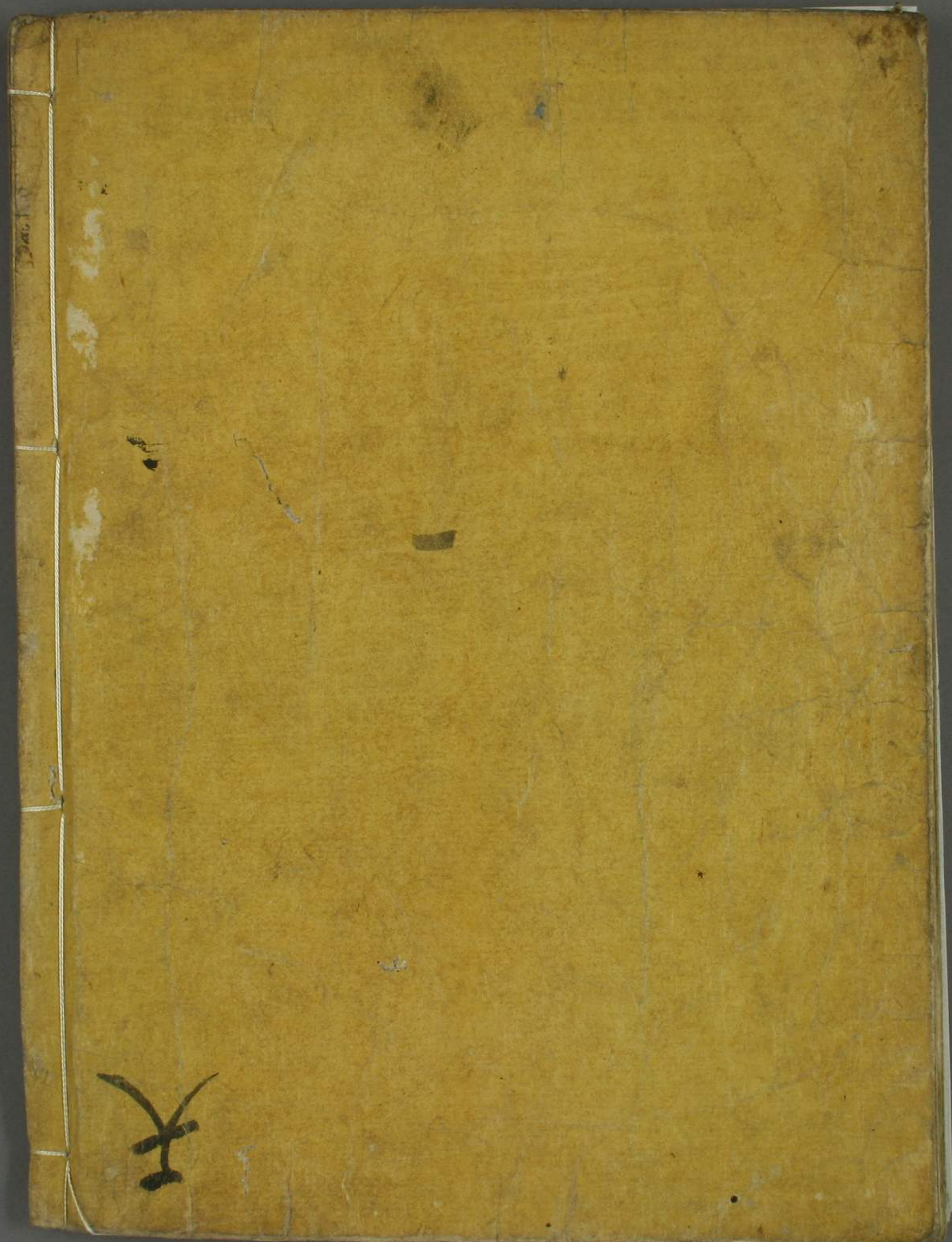
之其實高之雖曰憂之其實雖之故不我若也古又何

能為哉附者自以子之道移之官理可乎馳曰我知種

樹而已理沐之業也為吾居鄉見長入者好煩其令若

尚... 樹... 尾...





天